

ヤコブ・グリムと日本

野口 芳子

はじめに

『子どもと家庭のメルヒェン集』(通称『グリム童話集』)の編者であるグリム兄弟は、兄をヤコブ・グリム、弟をヴィルヘルム・グリムという。この二人はひとまとめにして語られることが多いが、人格的にも学問的にも大きく異なる。両者ともマールブルク大学で法学を学び、慣習法を含む伝承文学への興味から、民謡や昔話や伝説の収集へと向かう。弟は体が弱く文学的傾向が強い人物である。兄は頑健で、法学、文学、言語学、文献学、神話学、歴史学、民俗学など幅広い学問分野で業績を残した人物である。そのうえ、外交官や国民議会議長など政治的役割も果たしていた。

グリム兄弟の影響を受けた日本人は数多く存在する。芳賀矢一、巖谷小波、高木敏雄、柳田國男、佐々木喜善などがあげられる。とくに柳田國男はグリム兄弟と同様、法学部出身という

こともあり、昔話を古代の民の文化遺産、法と歴史と文学が一体となっていた時代の産物と位置付けるグリム兄弟の意見に多大な影響を受けたようである。

一方、グリム兄弟も、極東の日本に対して少なからぬ関心を抱いていた。兄弟はともにケンプファーの『日本誌』から日本に関する知識を得ており、さらに、兄のヤコブはツンベルクの『日本紀行』から、弟のヴィルヘルムはゴロヴァーニンの『日本幽囚記』から知識を得ていた。

本論の目的は、グリム兄弟、とくにヤコブ・グリムが日本に与えた影響と、グリム兄弟が日本に抱いていた関心について、考察することである。

一 幕末にヤコブ・グリムを訪問した日本人

グリム兄弟に対する興味を示した最初の日本人は文久一(一八六一)年の遣欧使節団員である。幕府は、米、英、仏、蘭、

露との間で結んだ修好通商条約で規定した四港の開市開港の延期交渉のため、欧州六ヶ国(英、仏、蘭、露、葡、普)に使節団を派遣した。使節団員のうち三人が、非公式にベルリンのヤコブ・グリム邸を訪ねている。グリム側には残っているその記録¹⁾が、日本側にはまったく残されていない。なぜならそれは、許可なく断行された異人訪問であり、公式のみならず、私的記録にも残すと、制裁対象になりかねなかったからだ。尊王攘夷運動が猛威を振るい、使節団の人選を担当した老中安藤信正が、文久二年一月一五日江戸城坂下門外で尊攘派の水戸浪士に切りつけられた事件が示すように、許可なく異人と交流する人物は制裁対象になりかねない時代だったのである。調査の結果、ヤコブを訪問した三人の団員は、松木弘安、箕作秋坪、福澤諭吉であったと推測される。この推測に至った理由については学会誌四四号の拙論に詳述している²⁾ので、本論ではその後の調査で判明した新事実のみを報告する。

二 三人の日本人がヤコブと面談した理由

文久遣欧使節の目的は外交交渉の他に、西洋事情の調査、とくに西洋教育事情の調査に重点が置かれていた³⁾。福田作太郎の公式報告書によると、西欧六ヶ国の「経済や刑法の書籍とならんで『文武学校規則之書』」を入手するよう指示されたという⁴⁾。

松木弘安(三〇歳)と箕作秋坪(三七歳)は蕃書調所筆頭教

授の眞作阮甫から、西洋諸国の教育制度を詳しく調査するよう密命を受けていた。眞作阮甫は西洋諸国の発展を教育によるものと認識しており、オランダの国民教育制度を邦訳して日本に紹介していた。そのため彼は蕃書調所の教師である息子秋坪と松木に、オランダやプロイセンの国民教育制度や教育税、大学、アカデミーなどについて詳しく調査するよう命じていたのである。眞作阮甫は嶋津斎彬が『水蒸船略説』を記させるために薩摩藩に招聘していたとき松木と知り合いになり、松木の能力を高く評価していた。それゆえこの二人に重要な密命を与えたのである。

松木弘安は「余と眞作秋坪とは病院学校等に治療教育及び組織の方法を探究せり。其他各分担あり。帰宿すれば之を筆記し、終に集めて大冊を成せり」と自叙伝に書いている⁵⁾。この文章から、欧州各国の病院学校の調査は主としてこの二人が記録したということがわかる。福澤諭吉(二七歳)が二人と行動を共にしていないのは、福澤は血を見ると気分が悪くなり失神するからである。シヤリテ病院でも斜視の手術に立ち会わずに途中で逃げ出したほどである。松木は言う。

然れども帰朝後之を讀むの暇なかりしなり。或云ふ福澤の著せる『西洋事情』多くは此見聞録に基づけるものなりと⁶⁾。

つまり、福澤の『西洋事情』は松木と箕作がまとめた記録書から転載したものであると主張しているのだ。福澤は帰国後国政に関与せず、幕府の要職にも着かなかったので、時間的余裕があった。それゆえ、多くの本を著している。『西洋事情』もその一つである。しかし、これは彼の仕事ではなく、松木と箕作がまとめた「欧州探検見聞録」からの転載なのである。福地源一郎の報告も「大方は福澤氏の西洋事情と同じ材料にて」と書いているので、これも松木たちの報告書の転載といえる。¹⁵⁾松木は横浜運上所で通弁方として働いていたとき、福地と同じ役宅に住んでいた。¹⁶⁾お互い気心が知れているので、自分たちの報告書を福地に見せた可能性もある。

松木と箕作が各国で精力的に病院訪問していたことは各地の新聞で報じられている。一八六二年五月一二日(月)の『タイムズ』は、松木弘安と箕作秋坪が唐通事太田源三郎を伴って、土曜日にキングス・カレッジ病院を再訪したと報じている。¹⁷⁾福澤は同行していない。結局、松木と箕作の記録が病院や教育制度などに関する報告書の基になっていたのである。

ヤコブ・グリムは日本人とオランダ語で会話したという。¹⁸⁾三人のうち、真つ先にオランダ語で質問したのは、松木であったと推測する。なぜなら彼はそれまでも長崎や鹿児島でオランダ人に直接質問する機会が多かったからである。そのうえ、彼は蘭語だけでなく、すでに一八五八年に英語とフランス語を修

せられている。¹⁹⁾松木は日本人初のフランス民族学会(Société d'Ethnographie)の会員になる。この学会は一八五九年にパリで創立され、当時の欧州各国の著名な民族誌学会や東洋学会の評議員を網羅した権威ある学会である。²⁰⁾

松木はロニーと盛んに文通し西洋事情を吸収しながら、「西洋の近代文明をその根底で支えている力の根源を見極めたい」と思っていた。²¹⁾近代文明をもたらしたものは科学技術の発展である。それは教育によってもたらされたものである。それゆえ、近代国家には国民教育が不可欠であるという結論に、彼は達したのではないだろうか。

ヤコブ・グリムが教育制度について詳しいという情報を、彼らはマグヌス教授(Herrn Gustav Magnus)から得たと推測する。彼はベルリン大学を案内してくれた物理学と化学の教授である。彼はユダヤ人であるが、ユダノイ²²⁾である妻と結婚したとき、ユダヤ教からキリスト教のカルヴァン派に改宗した。ヤコブと同じ宗派になったのである。彼は教会でヤコブに出会うことも、大学で出会うこともあった。なぜなら二人は同じ哲学部に所属し、同じ会議の構成員だったからだ。一八四九年のヤコブの講演「学校、総合大学、アカデミー(芸術音楽大学)について」のことを、マグヌスは思い出し、教育制度について詳しいのはヤコブ・グリムであると教えたのであろう。

ヤコブは右記の論文でプロイセンは、政治的にはフランス

学していた。²³⁾一八五八年幕府購入の蒸気船「威臨丸」が薩摩に立ち寄ったとき、指揮者カッテンダイーケ大尉に、松木が「矢継ぎ早に、あらかじめ用意してあったらしい質問の雨を降らして回答をもとめた」という。²⁴⁾さらに、「斉彬がオランダ人に質問し、その返答内容を宗則がかたわらで即座にメモする。その敏速な判断力にも彼らは驚いたという。²⁵⁾あらかじめ質問事項を準備して、質問の雨を降らせ、回答を速記するという手法で、松木はヤコブから情報を入手したのではないだろうか。オランダ海軍軍医ポンペは「薩摩は近年その発展がドクトル松木弘安に負うところが極めて大きい」と『ポンペ日本滞在見聞録』(一八五七―一八六二)に記し、松木の功績を高く評価している。

松木は医術だけでなく、自然科学一般に造詣が深く、とくに電信機や写真機には詳しく、文学的素養もある。眼科医ヘンドリクス博士の療養所を訪ねたとき、松木と箕作は手術を直ぐ真似て完璧にやり遂げて皆を驚かせた。その後、名刺や写真の交換をしたとき、松木は「写真術とは神の絵画です。その絵筆は光です!」と述べたと、プロイセン総合新聞(八月五日朝刊)が感心して伝えている。²⁶⁾

フランスの日本学者ロニーと最も親しくなったのも松木である。彼がロニー宛に出した手紙は現在残っているものだけでも一〇通を数えるという。²⁷⁾ロニーが後年編纂した『日本詩歌選集』(Anthologie Japonaise)にも松木の零墨一片と和歌一首が載

やイギリスに劣るが、教育や学問ではこの二国を越えていると断言している。²⁸⁾さらに、教育の基礎は言語であり、国とは同じ言語を話す人の総体でなければならないと主張している。²⁹⁾ヤコブのこの定義は語藩の集まりである江戸幕府から、天皇を中心とする統一国家を目指す日本人にとって、非常に参考になる意見である。

『西洋事情』で福澤が「欧羅巴にて文学の盛くなるは普魯士を以て第一となす」とプロイセンの学界を最も高く評価しているのは、ヤコブからの情報に裏打ちされたものであろう。教育に力を入れていたプロイセンが後に普仏戦争でナポレオン率いるフランス軍に勝利すると(一八七一年)、明治政府の関心はフランスからプロイセンへと急傾斜していく。

二 ゲルマニスティックを基に構築された日本の国字

一九〇一年にドイツで制定された統一的な正書法を日本の言語政策に応用した上田萬年は、旧仮名遣いの混乱を正すために、「言文一致」の必要性を説き、標準語、すなわちドイツ語の「ゲマインシェフラーヘ」の構築に尽力する。上田は、国語はドイツ語では「Muttersprache」と表現し、「国民の慈母」とあると説明する。³⁰⁾彼は言文一致の文体でグリム童話「狼と七匹の子山羊」を「おほかみ」という題名で一八八九年に邦訳している。³¹⁾

上田に続く東京帝国大学国語国文学教授で、国語とドイツ文献学を合わせた日本国文学の基礎を作り、近代国文学の父と称された芳賀矢一は、一八九八年に東京帝国大学助教授に就任すると、翌年にドイツに留学し、ベルリン大学哲学科に登録し、ドイツ文献学 (Philologie) を学ぶ。ドイツ語の山口小太郎とドイツ文学の藤代禎輔も同学科である。芳賀はヴィルヘルム・シェーラー (Wilhelm Scherer) が確立した包括的文献学をその弟子エーリッヒ・シュニット (Erich Schmitt) 教授から学ぶ。シェーラーは熱烈なヤコープ信奉者で、ヤコープについての最初の研究叢書出版者として知られている。つまり、芳賀がベルリン大学で学んだドイツ文献学は、包括的な意味を持つ「ゲルマニステイック」で、ヤコープが定義した「歴史と文学と法が一体となった」学問なのである。日本の国語が、国法、国語、国文になっているのは、ヤコープのゲルマニステイックの学説に基づいて構築されたからなのである。

芳賀がベルリンにいたとき、藤谷小波もベルリン大学付属東洋語学校の講師として滞独しており、芳賀は小波が主唱する句会「白人会」にも参加している。小波の『洋行土産』を通して、彼はグリム童話にも触れていたと思われる。芳賀と同時期にベルリンにいた山口小太郎や大村仁太郎は後にヘルバート派教育を日本に広め、グリム童話を学校の教材に利用しようとした人物である。同じくハウスクネヒトからヘルバート派教育を学ん

が『グリム童話集』の中から二話（「牧童」と「粟と炭とそら豆」）をローマ字訳してローマ字新聞に掲載している。おそらくこれは国嘉の仕事か、彼が添削したものであろう。初心者の学生（謙一郎や忠介）の訳とは思えないほど、見事なローマ字訳である。国嘉はドイツ留学中、森鷗外と懇意になり、グリム童話に関する情報も共有していたと思われる。森鷗外の長男、森於菟も山君という筆名で、グリム童話を一九〇二年から一九〇六年の間に一五話も鷗外の添削を受けて訳している。

「ローマ字ひろめ会」会員でグリム童話を訳している人に徳富猪一郎（蘇峰）が存在する。国民新聞社を主宰し、ジャーナリストとしても活躍した彼は、暁影生という筆名で、「ヘンゼルとグレーテル」と「フィッチャー鳥」を訳しているようだ。同会員の谷本富も、樋口勘次郎『修身童話』の校閲者として、グリム童話を教科書の教材にするよう尽力している。

「国家とは同じ言語を喋る人の総体」とであると定義したヤコープの言葉は、日本ではすべての国民が理解できる言語として、「ローマ字」と「かな」を主体とする国語の創出という運動へと発展していく。

藤岡と同じく上田の弟子で東京帝国大学教授である保科孝一は一九一一年から二年間ドイツとフランスに留学し、次のような報告をしている。

ドイツでは皇帝が小学校教員総会に出席し、教育が国にとつ

た谷本富も同時期にライプツィヒ大学に留学しており、芳賀たちと親しく交流していた。

四 国家問題としての国語

「国語と国家」との結びつきを熱烈に説いた上田萬年の弟子、藤岡勝二は保科孝一と共に国語国字運動に取り組み、国語のローマ字化に尽力する。西岡や矢田部良吉もローマ字専用を主張し、外山正一は漢字を全廃してローマ字にすべきと主張して、「羅馬字会」を結成する。藤岡もドイツ留学後、ローマ字化国語国字運動を国家的プロジェクトとして体現するよう尽力する。

羅馬字会の会員には東大の自然科学者が数多く存在する。おそらく、激しい国際競争のなかで、漢字を主とする日本語の存在が、学問の国際化を妨げていると感じたのであろう。物理学教授田中館愛橘は日本式つづりを主張したが、ヘボン式を主張する人々が大多数となり、運動から離れ別行動をとる。京大物理学教授田丸卓郎も『ローマ字国字論』を著す。医学分野からの賛同者も多く、とりわけ法医学初代教授片山国嘉は積極的に行動する。彼は禁酒誓約などをローマ字にして数種の本を作り、これを桐箱に納めて明治天皇に献上したのである。

「驢馬字会」が設立された一八八四年には、彼はドイツ留学中で日本にはいなかった。弟の片山謙一郎と教え子の井村忠介

で最重要事項であることを周知させている。しかし、フランスでは小学校の義務教育化が徹底しておらず、「国民の四分の一か三分の一はゆる無筆者である」という。この報告書を受けて、ドイツの教育を範とする文部省の方針が決まる。

保科は「かな」を中心とする新しい国語の創出を提唱するが、国文学者や漢文学者は猛反対する。学界だけでなく、政界の国粋政治家も反対し、「かな文字論」の保科の原案は何度も葬られてしまう。

五 ヤコープの理論に基づいた日本民俗学

グリム兄弟が編集した『子どもと家庭のメルヒェン集』を『グリム童話集』と訳したのはヘルバート学派で、教育的視点からの受容を目的としていた。同派の高木敏雄は「童話」は新しい訳語ではなく、江戸時代から存在する昔話を表す語で、『異制庭訓』で祖父祖母の物語を「童の昔ばなし」や「童話」と表現して、「むかしばなし」と読ませたり、「どろわ」と読ませたりしていると主張する。

高木は東大ドイツ文学科卒で、『比較神話学』『日本伝説集』『童話の研究』を明治末から大正期にかけて出版した日本初の昔話研究者で、「日本のグリム」といべき人物であると佐谷眞木人はいう。

柳田國男は高木の影響を受けて、グリム研究や昔話研究に踏

み出すが、メルヒエンを童話と訳すことに異を唱え、説話が昔話と訳すべきであると主張する⁽⁴⁾。東大法学部出身の柳田は、農商務省に就職し、そこで『遠野物語』の語り手、佐々木喜善に出会う。その成果が『日本昔話集上』(一九三〇)である。大正期末に国際連盟委任統治委員として二度渡欧した柳田は、西欧の民俗学研究に触れ、ホルテ・ポリフカの『グリム童話注釈書⁽⁴⁵⁾』を購入する。この本が柳田をグリム研究へと導いたのである⁽⁴⁶⁾。柳田はイギリスでは「否定的に捉えられていた民間伝承は、ドイツにおいては『ドイツらしさ』の象徴と肯定的に位置付けられ、自国文化を解明する手がかりとして扱われていた」と主張する⁽⁴⁷⁾。さらに、伝承文学を「平民の過去を知る」歴史資料と主張したグリムは、言語学の大家であり、ドイツ語の歴史を比較によって跡付けようとした「史学の開祖でもあった」と高く評価している⁽⁴⁸⁾。柳田は「ドイツ民俗学」をモデルと定め、その「始祖」であるヤーコブに倣って言語研究と昔話研究を軸に据えた民俗学を創設した⁽⁴⁹⁾。

柳田は犯罪記録を伝承文学として提示するという画期的な試みをする。

彼は著書『山の人生』で殺人罪で逮捕された美濃の炭焼きの犯罪記録を「山に埋もれたる人生あること」と題して巻頭で紹介している。

つつあるであろう」と書いている⁽⁵¹⁾。犯罪記録は常民の生活の記録でもあり、伝承されなければならないという認識は、伝承文学とは「法と歴史と文学」が一体となったものであると考えるヤーコブの認識と同じである。文盲であった民は法をポエジー(詩心、文学)で語るのである。

例えば「相続は剣から錘に行く」という表現は、相続はまず男性の後継者に行き、その後女性の後継者に行くという意味であるとヤーコブは述べる⁽⁵²⁾。慣習法を詩歌にして記憶するのだ。

伝承文学とは「法と歴史と文学」が一体となったトリアーテ(三者一体)であると説くヤーコブの言説を⁽⁵³⁾、柳田はこの話で見事に証明している。

佐々木喜善を「日本のグリム」と言語学者金田一京助が呼んだという⁽⁵⁴⁾。たしかに佐々木は昔話の価値をいち早く認めて収集し、編集して文字化した人である。「語る昔話」から「読む昔話」という新ジャンルを日本で開拓した人という意味では、「日本のグリム」に相当する。しかし、その編集方針は⁽⁵⁵⁾、グリム兄弟と大きく異なる。小学生の作文を採用するという発想はグリム兄弟にはなかった。彼らは猥談を避け、性的表現にも慎重な態度をとり、笑話には古くからの伝承が確認できる文献の裏付けをとった。家族団欒のみを語る佐々木の世間話には、柳田同様、グリム兄弟も収録に反対しただろう。また、グリム兄弟はあくまで収録者であり、佐々木のように語り手になることはな

女房はとくに死んで、あとには十三になる男の子が一人あった。そこへどうした事情であったか、同じ歳くらいの小娘を貰ってきて、山の炭焼小屋で一緒に育てていた。その子たちの名前はもう私も忘れてしまった。何とんでも炭は売れず、何度里へ降りても、いつも一合の米も手に入らなかった。最後の日にも空手で戻ってきて、飢えきっている小さい者の顔を見るのがつらさに、ずっと小屋の奥へ入って昼寝をしてしまった。

眼がさめて見ると、小屋のローばいに夕日がさしていた。秋の末の事であったという。二人の子供がその日当たりのところにしゃがんで、頻りに何かしているの、傍へ行ってみたら一生懸命に仕事に使う大きな斧を磨いていた。阿爺、これでわたちを殺してくれといったそうである。そうして入口の木材を枕にして、二人ながら仰向けに寝たそうである。それを見るときらくらとして、前後の考えもなく二人の首を打ち落としてしまった。それで自分は死ぬことができなくて、やがて捕えられて牢に入れられた⁽⁵⁶⁾。

この囚人は、六十近くなつてから、特赦を受けて世の中に出てきたという。農商務省の役人であった柳田は「仔細あつただ一度、この一件書類を読んで見たことがあるが、今はすでにあの偉大な人間苦の記録も、どこかの長持ちの底で蝕ばみ朽ち

かった。

グリム兄弟の業績は伝承文学にとどまらず、多くの学問分野に及んでいる。とくにヤーコブは言語学者、法学者、文献学者、歴史学者、民俗学者、比較民族学者でもあり、多くの学問の創始者でもある。その意味では佐々木より、むしろ柳田のほうが、ヤーコブと通底するものが多い。真に「日本のグリム」と称すべきは、やはり柳田國男であろう。

六 遣欧使節団員とグリム童話

(1) 松木弘安

松木は帰国後すぐに、生麦事件の処理に奔走し、幕末の薩長政治の矢面に立たされる。彼は薩摩藩の学生の英国留学に尽力するなど国民教育に心を砕く。

明治維新後は寺島宗則と改名し⁽⁵⁸⁾、政府の中樞で要職に就きながら、不平等条約解消、外国人の治外法権廃止など様々な問題に取り組み、英国公使、米国公使、外務大臣を経て文部大臣にも就任し、日本の教育行政にも尽力する。

寺島は国会に関する数多くの書物をワシントンから西周に送るが⁽⁵⁹⁾、その英書のなかにグリム童話の英訳本が含まれていた可能性も皆無ではない。なぜなら西周はその後、獨逸学協会学校の初代校長になるからである。

一方、政治の場から離れて、教育者としての道を選んだ福澤

と箕作は、民(る)の教育の重要性を認識して学校を設立する。両者とも国立ではなく私立学校という形で、政府とは一線を引く形で国民教育に尽力し、福澤は慶應義塾を、箕作は山文学舎(専修大学)を設立する。

(2) 箕作秋坪

秋坪の「三又学舎」は、福澤の「慶應義塾」と並び「洋学塾の双璧」と称され、東郷平八郎、原敬、平沼騏一郎、大槻文彦ほか、日本の政治や経済や教育を牽引する人材を輩出する。彼は森有礼と共に「明六社」を設立し、『明六雑誌』に「教育談」を書く。「欧米文化の進歩に従い。自宅において子女を教育することが、遙かに学校に勝るとい説が盛んである」として、「母となる女性」の教育に力を入れるべきであると主張する⁽⁵⁵⁾。実際、彼は一八八六年四月より東京高等女学校主幹を委託され、女性の教育に尽力する。

日本初の絵本『ハッ山羊』を一八八七年九月に訳した統計学者呉文聰は、箕作秋坪の姉せきの長男である。せきの末子呉秀三は、東大の精神医学科教授で、彼が巣鴨病院で指導した井村忠介は、第一高等中学校時代グリム童話『蠶と炭とそら豆』を『ROMAN NASS』にローマ字で訳している⁽⁵⁶⁾。呉文聰と井村忠介の訳は、いずれも英訳からの重訳ではなく、ドイツ語からの直訳である。

同じ話を「人の忠告を用ひずして損せし事」という題で邦訳する⁽⁵⁵⁾。松山は蘭学を学び、福澤諭吉と共に慶應義塾医学所を開設した人物で、深間内も慶應義塾で学んだ福澤の門下生である。このように日本で最初に紹介されたグリム童話は、いずれも福澤の門下生および福澤の友人が紹介したものである。

(4) 福地源一郎

遣欧使節団員の中にはグリム童話と関連を持つ人物がもう一人存在する。福地源一郎である。彼はグリム童話「死神の名付け親」と関連を持つ。この話は日本では落語「死神」として流布しているが、それは三遊亭圓朝が明治二〇年代に作ったものだ⁽⁵⁶⁾。出典はイタリアオペラ『クリスビーノと代母』だといわれているが、この話は『グリム童話集』にも「死神の名付け親」という題名で存在する。福地が遣欧使節団員として二回目の渡欧をした一八八五年は、パリではリッチ兄弟のオペラ『クリスビーノと代母』が初演され大当たりしていた。福地はその上演を見た可能性がある⁽⁵⁷⁾。そうだとすると、福地はイタリアオペラ「死神」を圓朝に語ったことになる。死神が枕元に立つと病人は死に、足元に立つと助かるという内容はイタリア版と同じだ。グリムの決定版では死神が足元に立つと病人は死ぬとなっている。なぜなら、病人と視線を合わせることができからである。一二世紀のヒルデガルト・フォン・ビンゲンだけ

母が子にする教育の大切さを説く秋坪は、その教材としてグリム童話が適切であると考えていたのではないだろうか。箕作家とグリム童話との関係はかなり深いものがある。文久遣欧使節団員として渡欧したとき購入したのか、その後入手したのか、箕作家にはグリム童話の洋書があり、姉せきがそれに触れていた可能性がある。せきの息子が二人とも、グリム童話の邦訳に関わることになるのは、偶然とは思えない。呉家と箕作家との関係は深く、文聰は母方の実家である箕作家の人々と親しく付き合い、相談事がある度に訪ねていたと、息子の呉建が証言している⁽⁵⁸⁾。

呉秀三は医者だが、上田萬年と同時期に東大の大学院生であり、兄文聰と上田萬年は同じグリム童話「狼と七匹の子山羊」を訳している。上田によると偶然だそうだが⁽⁵⁹⁾、同時期に統計学者と国文学者が同じ話を紹介しているのは注目し値する。

(3) 福澤諭吉

福澤諭吉の門下生である菅了法は、一八八七年四月に最初のグリム童話選集本『西洋古事神仙叢話(一)話収録』を英訳本からの重訳で出版する⁽⁶⁰⁾。それ以前、すでに一八七三年に、学校で使う英語教科書にグリム童話「釘」が収録され⁽⁶¹⁾、松山棟庵がその邦訳本『サルゼルト氏第三リイドル』で、「鍔杵の釘の事」という題で邦訳する。さらに深間内基も『啓蒙修身録』で

でなく、五世紀にアングロシウス・アウレリアスも説いているが、「死は目の窓を通じて侵入する」からである⁽⁶²⁾。しかし、『グリム童話集』の第二版では枕元に立つと死ぬとなっている。イタリア版ではベッドを回転させて死神を欺く行為はなく、寿命を示すのは蠟燭ではなくランプであり、死神は男性ではなく女性である⁽⁶³⁾。内容から見ると、福地はイタリア版ではなく、グリム版の第二版を使用して訳したとも考えられる。

福地源一郎(二二歳)は通詞代表森山多吉郎の愛弟子であり、森山に伴って代表の三使と行動を共にすることが多く、オペラの概要を抄訳して事前に三使に伝える仕事も任されていたので、自由行動がとりにくい環境にあった。そう考えると、福地がヤコーブを訪問した可能性は低い。

(5) 上田友輔の孫、上田敏

遣欧使節団で元締めとして随行した上田友輔は、第二遣欧使節団に理髪師として随行した乙骨亘を長女孝子の婿養子に迎えて、彼を上田綱二と改名する。その長男が有名な上田敏である⁽⁶⁴⁾。小泉直美によると、上田敏は東海生という筆名で「一大郎とおすみ」という題名で「ヘンゼルとグレーテル」を邦訳したという。収録雑誌は『日本之小學教師』で国民教育学会発行のものである。そこでは魔女は鬼婆、パンの家は餅の家、蒸し菓子や饅頭、金平糖や柿などが出現し、上田敏文学の特徴であ

る「彼方」という意味の「あなた」が統出する⁽²⁶⁾。同じ雑誌で上田敏は、「貧乏人と金持ち」「狼と七匹の子山羊」「星の銀貨」も訳出している⁽²⁷⁾。

七 ヤーコプ・グリムの業績

メルヒエン（昔話）や伝説の編者というより、民の法である慣習法や法律古事に明るい法学者であり、「言語と国」の関係を重視する言語学者としてヤーコプ・グリムは、国家標準言語を模索する幕末の知識人にとって、学ぶべきものを多く秘めた学者であった。

ヤーコプ・グリムはローマ法ではなく、ゲルマン法の価値を主張し、ドイツ語を話す人から構成される統一国家の出現を夢見ていた。しかし、彼は決して国粋主義者ではなく、非常に国際的な視点を持っていた。「ドイツの大地は、この地に留まる自由ならざる異邦人を自由にする⁽²⁸⁾」というヤーコプの言葉から、出身がどこであろうと、ドイツに住みドイツ語を話す人すべてをドイツ人と認識していたことがわかる。

多くの諸侯国の寄せ集めであり、統一した国を持たない状況にあったドイツ人にとって、ドイツ語を話す人々がまとまり、一つの国に統一されることは悲願であった。

ゲッティンゲン七教授事件⁽²⁹⁾で職を解かれたヤーコプを支援するためベルリンで奔走したのは、ユダヤ人法学者エドムアル

ト・ガンスであった。グリム兄弟の恩師「ザヴィーニの天敵であったガンス」が、グリム支援に奔走したのである⁽³⁰⁾。しかし、ヤーコプが好んで交友関係を持ったのは、フランスから宗教迫害でドイツに逃れてきたユグノーであった。なぜなら、ヤーコプ自身もカルヴァン派を信じるドイツ人だからである。彼はカトリックやルター派ではなく、カルヴァン派の人々が最も信頼できると自ら伝記に書いている⁽³¹⁾。

非常に国際的な視点を持つヤーコプの研究は、ドイツを世界のなかで捉えようとするものである。ドイツ語をインド・ヨーロッパ語族に属する言語の一つと捉え、音韻法を明らかにし、慣習法をドイツだけでなく、ヨーロッパ全体のなかで捉え、昔話や伝説に関しては、ヨーロッパにとどまらず、インドやアラビアなど世界全体のなかで捉えようとしており、極東の日本についても関心を抱いていた。

八 ヤーコプ・グリムの日本認識

ヤーコプはドイツだけでなく世界各地の古代の裁判や慣習法を含む語を収めた『ドイツ法古事誌』で、アラビア、インド、中国に続いて、日本の古代の法についても言及している。

「日本人は火審と潔白の飲み物を知っている」(Die Japaner kennen die Feuerprobe und unschuldstrank)と書いている⁽³²⁾。

火審は採湯⁽³³⁾のことで熱湯に手をつけて火傷しなければ無罪、火傷すると有罪という神明裁判のことだ。潔白の飲み物とは、カラス文字で書かれた熊野牛王の紙を細かくわきつて水で飲むと、潔白な人はそのまま飲めるが、罪人は苦しくなり白状するというものである。日本の古代の慣習法をヤーコプは知っていたのだ。ケンプファーの『日本誌』からの情報である⁽³⁴⁾。

また、ツンベルクの『日本紀行』からの情報として、
「日本では昔は死体を焼く埋葬が普通であったが、今では高貴な人のみ火葬するそらだ」と記している⁽³⁵⁾。

さらにヤーコプは、日本の雷や稲妻の名前の由来についても言及している。

日本人は雷のことを ikatsutsi, ikadsutsi, narukami, また逆に kaminari. という。 ikatsutsi は ikari-utsi. と同じ、すなわち敵⁽³⁶⁾の聲である。 narukami は鳴る神で、 kaminari. は神の音、神の声である。

稲光のことを、 inabikari, inadsuma, inadsurubi. という。 fikari は他の語と結合すると bikari. になり、光や輝きを意味する。 dsuma は妻、夫人である。 Tsurubi. は他の語と結合すると dsu-ri. bi. になり、性交を意味する。

ina は田の稲で、稲を輝かす、稲の妻(夫)、稲の交配である⁽³⁷⁾。

日本人が雷と稲妻を、稲の豊作をもたらす神々であると捉えていることを、日本語の語源から説明している。雷神が妻(夫)と性交すると、稲妻が光り、実りをもたらすという言い伝えは古くから存在する。青柳智之によると『日本書紀』で「雷電」に「イナツルヒ」と振り仮名がうたれており、稲と雷が交わって実がつくと信じられていたという⁽³⁸⁾。さらに、林信哉はその言い伝えは科学的見地から見て真実であるという。なぜなら、彼は稲妻が出すプラスマは植物の萌芽を促すことを発見したからである⁽³⁹⁾。

ゲルマン神話のなかで雷神トールは主神オーディンに並ぶ重要な神である。それは恵みの雨を降らせるからである。ところが日本人は雨だけでなく、稲妻の光も豊作をもたらすものと見なしていたのである。伝承が真実を伝えているということは、昔の日本人が自然の営みを鋭く観察していたからであろう。現代の日本の学者によって、そのことが証明されたのは快挙である。

雷神の語源を探ることにより、日本の民が持つ自然神の概念を探ろうとしていたヤーコプが、この発見を知ったら何というだろう。民がポエジーで伝えている日本の伝承は科学的根拠に基づいたものとして、高く評価することであろう。

九 ヴイルヘルム・グリムの日本認識

弟のヴイルヘルムはゴロヴァーニンの『日本幽囚記』の情報を鵜呑みにし、「日本人は柔和で親切だが、民を仕掛けてくる」⁽⁸⁾と書いている。また、日本人が支配しているアイヌ民族は柔和な人々で、「アイヌ語には罵倒する言葉がまったくない」とも述べている⁽⁹⁾。しかし、これは事実ではない。アイヌ語には「アオニサイ」という未熟な者を罵倒する言葉が存在する⁽¹⁰⁾。

「日本人のもとでは、あらゆることが、些末なことにといたるまで、上位のものから指導されている。だがゲルマン人のもとで、秩序は統一された高貴な種族の中心から形つくられた」と述べて⁽¹¹⁾、ゲルマン人の主体性を喧伝している。

さらに、彼は『子どもと家庭のメルヒェン集』第二版の注釈書で世界のメルヒェンを概観し、最後に日本のメルヒェンを一話紹介している。これについては次章で詳述する。

一〇 グリム兄弟が知っていた日本のメルヒェン

日本のメルヒェンとしてヴイルヘルムが紹介したのは「夜飛ぶ虫」(Nachtfliege)の話である。

飛び回るあらゆる虫のなかで最も美しく、日本でもめつたに見かけることがないため、娘たちが大切にしまっておくの

尚美である⁽¹²⁾。宮谷はこの虫を「蛭」と解釈してヨンケル著『扶桑茶話』⁽¹³⁾に収録されている『蛭姫の求婚者』(Prince Gleimchen's Freier)の話であろうと推測する。

Nachtfliegeを高橋健二が「蛾」と訳してから⁽¹⁴⁾、そのイメージが定着していたが、本来、Nachtfliegeとは「夜飛ぶ虫」のことである。夜飛ぶ虫の代表は「蛭」なので、この話は「蛭姫」の話を目指すのではないかという、宮谷の説はかなり説得力がある。しかし、その後、牧野陽子が『蛭姫の求婚者』という話は日本の昔話ではなく、グリフィス(William Elliot Griffis)の創作童話であるということを示した⁽¹⁵⁾。

ケンプファアのいう「夜飛ぶ虫」の話はどこから採ってきたものなのか、また振り出しに戻って調査し直さなければならぬ。玉虫のような外観が示唆されているが、玉虫は昼に飛ぶ虫であり夜行性ではない。オスは金と緑で美しく、メスは灰色で斑点があり、かつ、夜行性で、光を求めて飛ぶ虫などそもそも日本に存在するのだろうか。

日本の昔話として紹介したヴイルヘルム・グリムの文章は、引用が不正確であることによって、様々な憶測を呼ぶ解釈を引き出している。一方、ヤーコプが紹介した神明裁判である深湯、潔白の飲み物、雷の語源、火葬の風習などは、引用が正確であるので、日本に実在した慣習法や風習や語源などを特定することができる。

は、細長くて半円形の夜飛ぶ虫(Nachtfliege)だ。透明の翅は青と金の縦紋で飾られ、鏡のようにきらめいていた。夜に飛ぶ虫たちは皆この虫の美しさに恋い焦がれたが、この虫はすべての相手に、「まず、飛んで行って火を持ってきて、そうしたら愛してあげる」と言う。恋に目くらんで慌てて蠟燭に飛び込んだ虫たちは、深い傷を負い、帰ってくることはなかった⁽¹⁶⁾。

一六九〇年から一六九二年にかけて日本に滞在したケンプファアの『日本誌』からの引用として、ヴイルヘルムが紹介した文章である。この引用文はケンプファアの原文ではなく、ヴイルヘルムがメルヒェン風にアレンジしたものである。そのうえ、彼は最後の一文(左記)を削除して紹介していない。

この虫の雌は雄ほど美しくもなく輝いていない。灰色に近い色で斑点がある。

(Das weibchen ist nicht so schön und glänzend, sondern beinahe aschfärbig und geflekt)⁽¹⁷⁾

そうなるこの美しい「夜飛ぶ虫」は雄で、求婚する雌に火を持ってくるよう要求したことになる。これまでの通説とジェンダーが逆転していることになる。この点を指摘したのが宮谷

法学者であるヤーコプと文学者であるヴイルヘルムの特色が、日本についてのコメントにも表れている。

ゴロヴァーニンの『日本幽囚記』の情報を鵜呑みにし、「日本人は柔和で親切だが、民を仕掛けてくる」と書くヴイルヘルムに対して、ヤーコプはゴロヴァーニンの日本描写についてまったくコメントしていない。おそらく、捕虜として捕らえられた者の情報に信憑性を見出さなかったのであろう。そこにも法学者、文献学者としてのヤーコプの資料選択眼が見て取れる。

おわりに

ヤーコプ・グリムの学問的業績が日本に与えた影響は甚大で、日本の国学、教育学、法学、民俗学、説話学など、様々な分野に及ぶ。彼らの『子どもと家庭のメルヒェン集』だけが『グリム童話集』として一般に知られているが、グリム兄弟、とくにヤーコプ・グリムの言説や著書のなかには、封建制の江戸幕府から天皇制の近代国家へと生まれ変わる明治政府にとって、参考すべきものが数多く存在する。すべての国民が意思疎通できる標準語の創設、新しい国語の創出、法律の制定、義務教育制度の創設などである。

さらに、ドイツを発見したように、日本を発見するため、古くからの伝承文学を蘇らせ、その価値を再認識するよう促している。ドイツとは何かを探し続けたヤーコプは、日本とはいか

なる国で、いかなる国になるべきかを模索する人々にとって、示唆に富む言説を残してくれた人物なのである。

ドイツの教育学、薬学、医学、法学、鉄道敷設など、日本が手本にして発展した学問や制度は数多く存在する。目に見える制度だけでなく、国語や国としてのアイデンティティなど目に見えないものも、日本はドイツから、ヤコープから、多くの影響を受けているのである。

注

- (1) Grimm, Jacob: *Kleinere Schriften*. Bd. I, Hildesheim, Zürich, New York 1991. S. 186.
- (2) 拙論「幕末にヤコープ・グリムを訪問した日本人について」日本昔話学会編『昔話—研究と資料』四四号、二〇一六年、一〇三—一一七頁。
- (3) 岩田高明「『福田作太郎筆記』の『欧州探案』に見る西洋教育制度受容課程の分析—文久元年遣欧使節団による欧州学制探案—」日本教育史学会編『日本の教育史学』四九巻、二〇〇六年、一九—三二頁。
- (4) 同、二〇頁。
- (5) 榎本武揚子『寺島宗則自叙伝』（日本外交史人物叢書第一巻）ゆまに書房、二〇〇二年、一二三頁。
- (6) 山口一夫『福澤諭吉の西航巡歴』福澤諭吉協会、一九八〇年、二二八頁。宮永孝『幕末遣欧使節団』講談社、二〇〇六年、二三五頁。
- (7) 榎本武揚子、前掲、一二三頁。
- (8) 福地源一郎『懐往事談』民友社出版、一九〇〇年、一〇七頁。
- (9) 犬塚孝明『寺島宗則』吉川弘文館、一九九〇年、五九頁。
- (10) 鈴木健夫、P. スノードン、G. ヴォーベル共著『ヨーロッパ人の見た文久使節団』早稲田大学出版部、二〇〇六年、二八頁。
- (11) Grimm, Jacob: *Kleinere Schriften*. Bd. I. Berlin 1864. S.185.
- (12) 高橋善七『日本電気電信の父 寺島宗則』国書刊行会、一九八九年、三〇一頁。
- (13) 犬塚孝明、前掲、五〇頁。
- (14) 同。
- (15) 同、五一頁。
- (16) 鈴木健夫他、前掲、一二三頁。
- (17) 犬塚孝明、前掲、六七頁。
- (18) 同。
- (19) 高橋善七、前掲、八五頁。
- (20) 犬塚孝明、前掲、六八頁。
- (21) カルヴァン派を信じるフランス人。フランスから追放され、ドイツに移住した人が多い。
- (22) Grimm, Jacob: Über Schule, Universität, Akademie. *Reden und Abhandlungen*. Pederborn 2011 (1. Aufl. 1879). S. 214.
- (23) Ein Volk ist der Inbegriff der Menschen, welche dieselbe Sprache reden. Grimm, Jacob: *Verhandlungen der Germanisten zu Frankfurt am Main am 24. 25. und 26. September 1846*. Frankfurt am Main 1886. S.19.
- (24) 上田萬年『国語のため』富山房、一八九五年、一三—一四頁。
- (25) 上田萬年『おほかみ』吉川弘文館、一八八九年。
- (26) 佐野晴夫『芳賀矢一の国学観とドイツ文獻学』『山口大学独仏文学』二三巻、二〇〇一年、一三頁。
- (27) 同。
- (28) Lauer, Bernhard: Wilhelm Scherer. In: *Brüder Grimm Journal*. 12 Hefte. Kassel 2022. S.12.
- (29) 巖谷小波『洋行土産』上巻、博文館、一九〇三年。ここにはお伽芝居として四つのグリム童話（「灰かぶり」「赤ずきん」「いはら姫」「白雪姫」）が収録されている。
- (30) 柿木重宜『言語学者藤岡勝二とローマ字化国語国字運動』関西外国語大学研究論集』一一〇号、二〇一九年、一頁。
- (31) 小澤舜次『法医学始祖片山国麿』新人物往来社、一九七五年、六頁。
- (32) 拙論「ROMAJI ZASSHI に発表されたグリム童話について」『武庫川女子大学紀要 人文社会科学編』六三巻、二〇一五年、一一—二頁。
- (33) 山崎光夫『明治二十一年六月三日—鷗外「ベルリン写真」の謎を解く』講談社、二〇一二年、一六、一二—一七頁。
- (34) 「ツグミ髭の王」「ヘンゼルとグレーテル」「蛇と鈴蛙の話」「ルンベルンシュテイルツヒエン」「いはら姫」「星の銀貨」「雌鶏の死」「賢い百姓娘」「マリアの子」「わがままな子」「ものぐさ三人兄弟」「アレーメンの音楽隊」「蛙の王さま」「白雪姫」「幸運なハンス」の一五話。
- (35) 小泉直美『日本におけるヘンゼルとグレーテルの受容』梅花女子大学大学院博士論文、二〇二二年、五一—五二頁。
- (36) 浮田真弓「保科孝一の国語教育研究における国家主義と『国語』の民主化」『岡山大学大学院教育学研究科研究』一五八号、二〇一五年、六四頁。
- (37) 保科孝一『伯林と巴里』富山房、一九二四年、二四頁。
- (38) 同、九九頁。
- (39) 浮田真弓、前掲、六五頁。
- (40) 同。
- (41) 中山淳子『グリムのメルヒェンと明治期教育学』臨川書店、二〇〇九年。

- (42) 高木敏雄『童話の研究』婦人文庫刊行会、一九二六年、五十六頁。
- (43) 佐谷真木人「柳田國男とグリム」『慶應義塾大学日吉紀要 ドイツ語学・文学』二〇一九年、一三四頁。
- (44) 同、一三九頁。柳田はKHMを『児童家庭説話集』と訳す。
- (45) Bolte, Johannes/Polivka, Georg: *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm*. Berlin 1912-1932. 5 Bde.
- (46) 佐谷真木人、前掲、一三八頁。
- (47) 同、一四〇頁。
- (48) 同。
- (49) 佐谷真木人、前掲、一四二頁。
- (50) 柳田國男『遠野物語・山の人生』岩波書店、一九七六年、九三―九四頁。
- (51) 同、九四頁。
- (52) Grimm, Jacob: *Kleinere Schriften*. Bd. VI, Berlin 1882. S.163.
- (53) Grimm, Jacob: *Kleinere Schriften*. Bd. VIII, Gütersloh 1870. S. 547.
- (54) 石井正己『柳田國男を語る』岩田書院、二〇二二年、一―六頁。
- (55) 石井正己『佐々木喜善論―口承文芸への逆襲』『口承文

容』大野寿子編『カラト図説 グリムへの扉』勉誠出版、二〇一五年、二二―二三四頁。

- (66) 麻生芳伸『落語百銭 秋』筑摩書房、一九九九年、三八―四三九頁。
- (67) 西本晃二『落語「死神」の世界』青蛙社、一九九六年、二三―六頁。
- (68) 同。
- (69) 池上俊一『歴史としての身体』柏書房、一九九二年、九―六頁。
- (70) 西本晃二、前掲、二九七、三二―三頁。
- (71) 石黒敬章『幕末明治の肖像写真』角川学芸出版、二〇〇九年、一七頁。
- (72) 小泉直美、前掲、一八一―三八頁。
- (73) 同、二六頁。国民教育学会編『日本之小學教師』三卷三〇号、三五号、三六号、國民教育社、一九〇一年。
- (74) Grimm, Jacob: *Kleinere Schriften*. Bd. VIII. Gütersloh 1890. S. 439.
- (75) 一八三三年、民主的な新憲法を破棄したハノーファー国王に抗議してグリム兄弟を含む七人の教授が解雇された事件。
- (76) 堅田剛『法のことば、詩のことば』お茶ノ水書房、二〇〇七年、二八―八頁。

芸研究』第二八号、二〇〇五年、四十七頁。

- (56) 松木弘安は、出水陶藏、寺島陶藏、寺島宗則と三回改名する。
- (57) 高橋善七、前掲、二五四―二五五頁。
- (58) 治部丸憲三『箕作秋坪とその周辺』箕作秋坪伝記刊行会、一九七〇年、一五―七頁。
- (59) この話はグリムではなく、ベツヒシユタインのものだと大瀧は主張する。大瀧知直『異文聴訳『ハツ山羊』の底本を巡る考察』『国士館大学教養論集』七二号、二〇一二年、一一―二〇頁。しかし、七匹の子山羊がすべて食べられるわけではないので、グリム版の可能性もある。
- (60) 拙論『『ROMAJI ZASSI』に邦訳されたグリム童話について』前掲。
- (61) 呉健編『異文聴』杏林舎、一九二〇年、六一―六二頁。
- (62) 木村小舟『お伽花籠』博文館、一九〇八年、二頁。
- (63) 拙著『グリムのメルヒェン』勁草書房、一九九四年、一一―一二―一三五頁。
- (64) The Horse-Shoe Nail (KHM 184) In: Sargent, Epes: *Sargent's Standard Third Reader*. Boston 1859.
- (65) 府川源一郎「アンデルセン童話とグリム童話の本邦初訳をめぐる」『文学』九巻四号、二〇〇八年、一四―一五一頁。拙著『明治期におけるグリム童話の翻訳と受
- (77) Grimm, Jacob: *Kleinere Schriften*. Bd. I. Berlin 1864. S. 1-2.
- (78) Grimm, Jacob: *Deutsche Rechtaltertümer*. Bd. 1. Göttingen 1828. S. 937.
- (79) Kämpfer, Engelbert: *Geschichte und Beschreibung von Japan*. Bd. I. Lemgo 1860. S.289.
- (80) Thunberg, Carl Peter: *Reisen durch einen Theil von Europa, Afrika und Asien [...] in den Jahren 1770 bis 1779*. Bd. 1. Übers. v. Christian Heinrich Groskurd. Berlin 1792.
- (81) Grimm, Jacob: *Kleinere Schriften*. Bd. II. Berlin 1865. S. 305.
- (82) Ebd., S. 436-437.
- (83) 七二〇年に成立した『日本書紀』には振り仮名が打たれていない。後代の写本の一部に「イナツルヒ」と付訓されているものが存在する。
- (84) NHK『雷が豊作をもたらす』は本当? 言い伝えにサイエンスで迫る』で二〇二二年一〇月九日午前に放送された番組と次のサイト <https://www.3nhk.com/watch/2022/10/09/> 閲覧日二〇二二年一〇月九日。イナツマについては稲を孕ませるので、稲妻ではなく、稲夫とするという研究者が多い。青柳智之『雷の民俗』大河書房、二〇〇七年、三四頁。
- (85) 同サイト。
- (86) Grimm, Wilhelm: *Kleinere Schriften*. Bd. I. Berlin 1881. S. 563.

- (87) Ebd.
- (88) 『ののいち地域事典』富奥郷土史資料集五 方言、アオニサイ（未熟な者を罵倒する言葉）一九七五年。野々市町情報文化振興財団デジタル事典 http://tiikijiten.jp/digibook/tomioku_kyoudo/keitai.php?no=0020&part=3
閲覧日 二〇二二年一月二二日。
- (89) Grimm, Wilhelm: a. a. o., S. 566.
- (90) Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Bd. 3. Hrsg. v. Heinz Rölleke. Stuttgart 1980. S. 351.
- (91) Kämpfer, Engelbert: a. a. O., S. 149.
- (92) 宮谷尚美「グリムが伝えた日本の『メルヒェン』—近代の日独異文化コミュニケーションの謎に迫る」ASPEKT (36) 立教大学、二〇〇三年、一八一—二九頁。
- (93) Junker, Ferdinand Adalbert von Langeegg: *Japanische Theesgeschichten. Fu-so-Cha-wa*. Wien 1884.
- (94) 高橋健二『グリム兄弟』新潮社、一九六八年、三二—三三二頁。
- (95) 牧野陽子「ウィリアム・グリフィスの日本民話集について—『蜃姫の求婚者』と『雷の子』」『成城大学経済研究』二二一号、二〇一六年、一一—一六頁。